

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

多様な世界を巡って

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4559



多様な世界を巡る

八杉 佳穂

やすぎ よしほ

Profile

1950年生まれ 広島県出身
国立民族学博物館教授
専門分野●中米言語学
著書●『チョコレート文化誌』、『マヤ文字を書いてみよう 読んでみよう』、『マヤ文字を解く』、他

今回の特集は、世界のさまざまな民族が、食に関して、どのような語彙をもっているかを示そうとした企画である。四千とも七千ともいわれる民族言語の中の二十あまりの言語であるから、とても人間の食に関する語彙の範囲を示すようなものとはいえないが、各大陸から少なくともひとつは入ってもらうようにした。執筆を依頼したのは性向の異なる言語学者と人類学者である。そのため、さらに各稿においても見方やとらえ方が異なっており、人間というのは、民族のレベルはもちろん、個人のレベルでも、いろいろな見方や考え方があることを図らずも示すことになった。

最近食の問題が深刻化しているらしい。まともに三食とらない人やただ空腹を満たすだけで、栄養はサプリメントでとればいいという考え方の人もいる。私も学生時代、毎回食事に行くことが恥ずかしくて仕方なく、何度やめようと思ったものである。そのため、なぜ食ることが恥ずかしいのか、なぜ食べる必要があるのか考え続けた。排便が同じように恥ずかしい行為であるが、おそらく頭だけで考えすぎて、動物的であることが、とてつもなく恥ずかしく思えたからであろう。それが逆に、共食や儀礼の意義を考えるものになったのだが。

食はたいへん文化的なものであり、それぞれの文化が反映している。およそ人間が利用するものには名前がつき、食物を口にする行為は同じでも、環境が違い、民族が違えば表現が異なる。日本語や中国語やヤクト語では、スープを飲むというが、英語やロシア語では食べるという。噛む行為と飲む行為は当然異なると思うが、民族によっていろいろである。テンボの人たちにとって、練り粥をソースにつけてツルツと滑らせて飲み込むものが正式な食事であり、噛む食事は正式な食事ではないという。タミール語では噛んで食べるのと噛まずに飲み込む違いがみられた。逆に食べるのも飲むのもキンと言わずませる黒タイ語のような例もある。

満足度は、カメルーンのバカの人々の間では、甘さ、脂っこさ、量が重要だというが、ミャンマーでは、脂という。食事の満足度においても文化的な違い

ケクチマヤのトルティリヤ作り
(写真：筆者撮影)



が見られる。特にパンやご飯など、主食がないと食事にならないし、おなかも満たされないのはどこでもあるようだ。

私も貴重な経験をしたことがある。グアテマラ高地のキチエマヤの人と食事を互いに作りあったことがある。彼らの主食はトウモロコシをクレープ状にしたトルティリヤである。我々はご飯とおかずを提供し、彼らはトルティリヤとスープという日常食べているものを交換した。一食分を十分互いに食べたのであるが、なぜか物足りない。彼らはトルティリヤを食べ直し、我々はご飯を食べ直して、互いにやっと満足した。

主食はその民族の最大の関心事のひとつであるから、当然いろいろな表現がある。ご飯を主食とする我々は、稲、米、ご飯と区別するが、小麦、イモ、トウモロコシを主食とする世界各地の民族も、それが口に入るま

で、いろいろな細かに語彙化している。紀元前三千年から用いられたシュメール文字には、パンを口にする文字さえできている。

主食となる食べ物は、「食べる」という動詞になったり、食事全体を指す名詞になりやすい。オーストラリアの原住民のように、植物性と動物性の食べ物という分け方をするが、全体を指す語がないということも起こりうる。逆に、関心のないものは、ハシーシュのごとく草という言葉ですませる。

日本語の動詞は意味範囲が広く、細かな区別は副詞とする傾向があるが、繊細な日本料理を生みだした国であり、調理法の動詞は、「ゆでる」「蒸す」「煮込む」「炒める」「揚げる」「焼く」「炒る」など、さすがに豊富である。それに対してフィンランドでは、パイスターとケイッターの二語で十分だという。ツィムシャン語では×という接頭辞ですむところから、世界は多様である。

新大陸原産のトウモロコシやジャガイモは、多くの人を飢えから救ったが、グローバル化が進んで、食材の貧しいところにも、いろいろなものが入って

いった。それらの名前の多くは、ヤクルト語で見られるように、借用語ですまされる。ヨーグルトの本場ブルガリアでは、本来のヨーグルトはサワミルクや発酵ミルクといって、西洋の大企業によってデザートとして入ったものがヨーグルトというふうである。

去勢した豚しか食用にならないというのも食材や人間を考える上でおもしろい。我々がふつう食べないものを違う民族の人が食べていることがある。象など我々にとって禁忌とも言えるものは、食事として出されると、おそらく大方の人がえずくであろうが、ごちそうとして食べる場合もある。それを珍しいものを食べている、私も食べてみようというくらいならいい。文化的な差が差別になる可能性がある。

世界にはたくさん言語があり、同じものでも、見る目が違うし、区別の仕方が違う。そして表現の仕方が異なる。違いは争いのもとになりやすいが、違いや多様性を豊かさとして認めることこそ、二一世紀の我々にとって、ポスト・グローバルの社会になればなるほど、大切となるに違いない。